大空（生徒・保護者向け）４５号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校　校長通信

令和3年9月17日（金）

学（まね）ぶと品（しな）―高総文壮行式―

□本日の概要

１　現代語の「学ぶ」は古語の「まねぶ」が出典であり、もともとは「真似をする」という意味である。真似、すなわち模倣は学びの基礎である。

２　多くの芸術は、良いものの真似をすることから始まる。今は良いものをどんどんインプットする時期である。

３　古語の「品（しな）」は人の品格（気高さや上品さ）を意味する。上品な人間は、良い文化を吸収することでつくられる。

４　アウトプットは良くも悪くも形として出てくる結果であるが、アウトカム（成果）を出すには努力や工夫が必要である。良いものを吸収し、努力して成果を出して欲しい。

５　本日のＮＦＣ　感性（美意識）　主体性　創造力

□古語の学ぶ（まねぶ）は「真似をする」

現代語の「学ぶ」は、古語では「まねぶ」といいます。意味は「真似をする」です。

このことは、学ぶこととは、まず人の真似をすることから始まったことを示しています。人間の脳は、ミラーニューロン細胞の働きにより他者を真似をするように創られていることは何回か紹介しましたが、学びに限らず、真似は人間が成長するための大切な仕組みです。例えば、赤ちゃんは目に映ったものを真似することによって表情を覚えていきます。授業中あくびが伝染するのも、オリパラの選手の涙を見ると、私たちにも熱い思いがこみ上げてくるのも、この「真似」をするように創られているという脳の仕組みがベースになっています。

□真似は学びの基本

だからといって、盗作や論文の盗用を肯定するのではありません。真似は良くないと言われながら、実は「お手本を真似る」ということは成長のための有効な方法なのだということは知っておいてください。

昔の寺子屋では、漢文などの意味が分からなくても、先生のまねをして繰り返し繰り返し暗唱し、内容の理解は後からついてくるという勉強の仕方でした。音楽も、先生の演奏の真似から始まります。絵画でも、絵の基本的なトレーニングの方法として模写があります。書道も、著名な書家の筆跡の真似をします。芸術だけでなく、料理でも、一度食べて感動した、あの味、あの食感を再現しようという試みであり、一度も食べたことがないものを創造している訳ではありません。もちろん、オリジナルを生み出すことは大切ですが、オリジナルを生む前段階として、良質のものをたくさん真似る、つまり、良いものをインプットするという基礎形成期間が重要なのです。

□良いインプットは品（しな）を高める

高校総合文化祭が行われます。多くの芸術、そしてそれに取り組む仲間が一堂に会しますが、これは良いものをインプットするチャンスです。ぜひ、多くの良いものを吸収してきてください。

インプットに取り組むのは、高校総合文化祭に参加する皆さんだけではありません。１０代とは、読書でも音楽でも何でもインプットの旬なのです。「おふくろの味」という言葉が、幼い時のインプット体験が味覚形成に大きな影響を与えていることを示しているように、１０代の時期に、名作とか名演と言われるものに出会うことは、人格形成に大きな影響を与えます。芸術だけでなく、学問でも同じです。

「品」は、「ひん」「しな」とも読みますが、古語辞典では、見出しには「しな」と示されています。「しな」というと、「品物」が連想されますが、古語的には、「①　階段などの段」という意味です。（漢字のデザインが、まさに段の形を表現しています）そこから、「②　階級。身分。家柄」という意味が生まれ、「③　品格。人柄」という人の内面の差を意味するようになりました。

現代では③の意味の場合、「しな」とは言わず、「ひん」と言うようになりました。「品格」という熟語がありますが、大辞泉によれば、「その人やその物に感じられる気高さや上品さ。品位」という意味です。

古文では、例えば徒然草では、

「興なきことを言ひてもよく笑ふにぞ、しなのほど計られぬべき」

（おもしろくないことを言っても良く笑うことで、品格の程度が推し量ることができるだろう）とか、

源氏物語では、玉鬘という源氏の娘（養女の美しさを形容した文章で、

「父大臣（おとど）の筋さへ加はればにや、しなたかくうつくしげなり」

（父の大臣の血筋まで加わるからであろうか、上品でかわいらしいようすである。）とあり、古代から日本人が「品」を重視し、身につけるために努力していたことがうかがえます。

かつて、幕末に西欧列強が日本に進出してきましたが、彼らが驚いたのは日本人の品性の高さでした。当時の西欧社会も、日本も階級社会でした。しかし、日

本は、武士以外の庶民にも、例えば寺子屋などの教育機関があり、庶民の就学率、識字率は世界でもトップクラスだったという人もいます。文字を読み、本を読む知識人が多く、言葉を通じて様々な道徳的規範が末端まで浸透していた、極めて希有な国ということができるでしょう。この私たちの品性の高さは、今でも私たちの文化として、私たちの体に染みついています。

この品性の高さは、美意識といいかえてもいいと思います。この日本人、日本文化の品性、美意識を私たちはもっと誇りに思っていいし、この素晴らしさを継承して欲しいと思います。文化的に良いものをインプットするということは、単なる真似にとどまらず、「品高き」人間、つまり上品で高い美意識を持った人間をつくることにつながります。

□脳はなぜ悪いことを好むのか

私は、現代社会は、この良い文化の摂取習慣が衰退し、むしろ悪いものがインプットされる傾向が強まっているのではないかと危惧しています。

残念なことに、人間の脳は不快なもの、不安定、不完全なものを強く意識する性質があります。これは、何万年も前、私たちの先祖が生き延びるためには、危険な情報を認知することが最重要であったという進化の歴史に基づいています。危険な情報をいち早く察知したり、相手との距離感を察知することは、古代においては生き延びるために必要な能力でした。その進化の名残として、私たちの脳は、悪いことをキャッチするため、いつも様々なことに関心を向ける、つまり気が散りやすくつくられています。また、常に回りの人や噂が気になります。生き延びるためには、誰が信用でき、誰と距離を取った方がいいかを把握することが必要だったからです。敵を見つけたり、同盟を組んだり、そんなことを繰り返してきた進化のプログラムが、現代人の私たちの脳に組み込まれていることは知っておいた方がいいでしょう。脳が積極的に動く時、様々な物質が分泌されますが、これは人間に快感をもたらします。もし、現代においてはあまり良くない行為だったとしても、脳の報酬系を刺激し「快」と感じるような循環ができあがってしまうと、理性ではなかなかやめることができません。

脳の特性だからといって、私たちが脳の欲するままに行動していいという訳ではありません。私たちが脳をコントロールするためにも、脳はニュートラルではない、むしろ放っておくと良くない方向にすすむ危険性があるという事実は知っておいた方がよいでしょう。なぜなら、自分の感情（脳）を客観的に見ることや、ブレーキをかけることは大変難しいからです。例えば、食欲ひとつにしても制御することは大変難しいことは皆さんも分かるでしょう。世の中に依存症といわれるものが多くあるのも、この脳の仕組みによるものです。

しかし、脳には、欲望を抑える能力もあります。また、悪い情報や習慣をインプットせずに、良いものに置き換えることができると、脳は素晴らしい能力を発揮します。一般的には辛そうに見えることでも、脳がそれを「快」と認識するようになると、人間は努力を続け、高みに上ることができるようになります。社会的に成功している人や、アスリートなどは、脳の特徴を生かし、良い方向に置き換えができた人です。

脳の本能的欲求をコントロールするのが理性です。理性は、脳科学的には、脳の前頭葉という部分が担当しています。前頭葉は人間が進化するにつれて発達した部分ですので成熟が遅く、その成長のピークは１０代です。つまり、１０代の脳は発達段階であるため、１０代の若者が理性で自分をコントロールすることについては十分な能力があるとは言えないのです。そのため、社会は１０代の皆さんに対して様々な規制をかけて、成長段階の脳に悪いものを「快」と認識させないような仕組みを作っています。

皆さんの脳も例外ではありません。だから、今は、意識的に良いものをインプットし、脳に良い習慣を「快」と感じさせるようにトレーニングすることが大切なのです。私が前向き思考の重要性を繰り返し語るのも同じ理屈です。

といっても、世の中で「良い」と言われているものは、いったいどこが良いのかよく分からないものが多くあります。刺激に乏しく、退屈に感じることさえあります。また、良さが分からない自分に対して自信を失うこともあります。でも、分からなくて良いのです。良いと言われるものは、分かりにくいのです。それでも触れているうちに、分かるものが出てきます。分からないといってインプットしなければ永遠に分からないままです。自分の脳をコントロールするためにも、自分の脳へ、良いもののインプットを重ねてください。

□アウトプットからアウトカムへ

インプットの後はアウトプットが大切ですが、アウトカムという用語もあります。アウトプットは良くも悪くも形として出てくる「結果」です。それに対して、アウトカムはよく「成果」と言われます。例えば、宮崎市が市民文化ホールを作ったのはアウトプットですが、そのホールを活用して、文化的行事を開催し、その成果として「宮崎市民が文化に親しむようになった」のがアウトカムです。

文化部の生徒が高校総合文化祭に参加することによって、宮崎西高校の文化部や生徒会がもっと盛んになり、学校全体の文化的センスが上がるというのがアウトカム、つまり成果です。成果を上げるには、ただ参加したという事実だけでは不十分で、参加したことを何らかの形で皆に還元したり、作品に反映したりという努力が必要です。

努力のない成果はありません。その意味で、参加する皆さんには責任があります。漫然と参加するのではなく、素晴らしいものを吸収し、君たちが、素晴らしアウトカムをもたらすことを期待しています。

○参考
アンデシュ・ハンセン　『スマホ脳』新潮新書（2020）
中野信子『脳はどこまでコントロールできるか？』ベスト新書（2014）